

令和 7 年 (第 19 回) みどりの学術賞 受賞者

もりもと ゆきひろ
森本 幸裕 (77 歳)

公益財団法人京都市都市緑化協会理事長、京都大学名誉教授

功績概要 : 「景観生態学的研究を基盤とした都市における自然再生」に関する功績

都市の自然を再生し、人と生物に快適な環境を形成する視点から、京都において都市緑地の規模・分布と生物の分布の関係を分析し、景観構造が生物種に与える影響を明らかにした。また、都市に形成された緑地を長期間にわたりモニタリングし、都市内に再生された緑地の管理手法を提言したほか、都市型洪水の緩和と生物の生息環境の改善のため降雨を地中に浸透させる「雨庭」の整備を提案し、実現に尽力した。さらに、日本景観生態学会長等を務めるほか、日本・韓国・台湾の複数の自然再生関連学会の連合体 (ICLEE) を設立し会長を務めるとともに、名古屋での生物多様性条約締約国会議時に開催された「都市と生物多様性会議」の共同議長を務めるなど、学術推進に尽力した。これらの成果により、都市における景観生態学の学術研究とともに造園技術の社会実装に大きく貢献した。

きょうづか じゅんこ
経塚 淳子 (65 歳)

東北大学大学院生命科学研究科教授

功績概要 : 「植物の分枝制御機構とその進化的成立過程の解明」に関する功績

植物の成長力と生産力を支える分枝について、イネを用いて植物ホルモンのストリゴラクトンが分枝抑制に関わることを発見した。あわせて、ストリゴラクトンの生合成や花序分枝の制御に関わる遺伝子を明らかにし、これらに基づき提唱した概念は、イネ科植物の花序形成機構の基盤として認知されている。さらに、コケを用いた研究成果は、ストリゴラクトンがもつ分枝制御機能と根圏シグナル物質という二面的機能の解明へ発展し、植物の成長制御の起源や成長法則の解明につながった。また、茎頂分裂組織の発生や維持に不可欠なサイトカイニン生合成の新規経路も解明した。加えて、日本植物生理学会長として学会を先導するほか、植物科学の書籍の執筆や翻訳等に尽力している。これらの成果により、分枝制御機構とその進化的成立過程の解明を行い、植物科学の発展に大きく貢献した。

(年齢及び肩書は令和 7 年 3 月 7 日現在)